慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	発話としての文末「カ」の文
Sub Title	
Author	林, 淳子(Hayashi, Junko)
Publisher	慶應義塾大学日本語・ 日本文化教育センター
Publication year	2019
Jtitle	日本語と日本語教育 No.47 (2019. 3) ,p.1- 18
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20190300-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』47: 1–18（2019.3）

発話としての文末「カ」の文

林　　淳　子

1.　終助詞「カ」と疑問文

日本語の疑問文を構成する文法形式として代表的なものをひとつ挙げるならば、それは終助詞「カ」であろう[1]。きわめて単純に言えば、日本語の疑問文は平叙文末に「カ」を付すことによって成立すると言うこともできる。そこまで単純でなくとも、終助詞「カ」が疑問文という文の種類と深くむすびつく文法形式であることは疑いない。しかしながら、一方で、「カ」と疑問文のむすびつきを疑いたくなる次のような事実も存在する。

1. 終助詞「カ」は疑問用法に限らず、多様な用法を持つ。
2. 終助詞「カ」は疑問文の成立にとって不可欠な要素ではない。普通体の疑問文においては「カ」がない方が自然である。

これらの事実自体は以前から指摘されている（佐久間 1940、益岡 1992、益岡・田窪 1992 など）ものの、この事実と一見矛盾する「「カ」は疑問文に深くかかわる助詞である」という印象とがどのように両立しているかは不問に付されてきた。本稿では、終助詞「カ」と疑問文の関係把握に向けた予備的考察として、終助詞「カ」の用法の広がりを改めて観察し、終助詞「カ」の様々な用法における疑問用法の位置づけを確かめる。これにより、疑問文と「カ」の関係を考える一助としたい。

本稿の構成は以下の通りである。まず、2 節で先行研究が終助詞「カ」の多様な用法をどのように整理してきたかを見る。それを踏まえ、3 節では本稿の用法整理の方針について述べる。4 節で本稿の方針に沿って文末に「カ」を置く文の用法を整理し、全用法に共通する特徴を指摘する。5 節では普通体の文末「カ」の疑問文が「えらそうな男性」の話し方である

という従来の議論を文末「カ」の文全体の中で捉え直す。最後に、6 節では本稿の分析の範囲内で終助詞「カ」と疑問文の関係について考えられることを述べる。

2. 先行研究

「カ」の多様な用法をひろい上げる先行研究の中では、益岡 2007 の整理がもっとも詳しい。益岡 2007 は「カ」を「「不定性」を表す助詞（標識）」とみなし、「カ」が表す不定真偽判断として表 1 の A）～G）の 7 種を挙げる。（例文右の括弧内に益岡 2007 での例文番号を示す。）

益岡はこの 7 種のうち、A）質問・自問、B）不確かさ、C）納得・了解、D）発見は事態の真偽に関する認識のあり方を表す「認識系」であるのに対し、E）驚き・感嘆・詠嘆、F）不満、G）反語・擬似反語は話し手の感情の関与という共通点がある「感情系」であるとして、全体を「認識系」と「感情系」に二分する。そして、その上で E）驚き・感嘆・詠嘆は新規獲得情報に対する不定真偽判断である点で C）納得・了解や D）発見と共通しており、この点をもって認識系と感情系は連続すると見ている。

この整理は、「カ」が用いられる文に認識面の不定性が前面に出る用法と感情面の不定性が前面に出る用法があると指摘する点で日本語話者の直感に適うところがあるものの、次の二点において問題があるように思われる。

ひとつは、扱われる例が混質的である点である。文末に置かれる「カ」と文中にある「カ」を区別せずに扱っており、たとえば、B）不確かさの例（3）～（5）（益岡 2007 では（28）～（30））のうち（3）は文末「カ」の例であるが、（4）（5）は文中「カ」の例である。しかし、文中「カ」の場合、「～カ」の部分だけで不定真偽判断のタイプを定めることは難しく、「～カ」に後接する動詞の語彙的意味に頼るところが大きいように思われる。たとえば、B）不確かさの例である（3）「なにか郵便屋でも来たのかと思った」、C）納得・了解の例である（6）「それが舞踏の訓練に加えて、スキューバダイ

表 1　益岡 2007 の整理

A）質問・自問
（1）引っ越されたのはご結婚のためですか。（p. 172（25）） （2）額が禿げあがっている。五十歳前後というところか。（p. 172（26））
B）不確かさ
（3）ま、これならいいか。（p. 172（28）） （4）こうして信夫が投じた洪積世人骨という一つの渦は、考古学、人類学会に大きな波紋を広げていくかに見えた。（p. 172（29）） （5）なにか郵便屋でも来たのかと思った。（p. 172（30））
C）納得・了解
（6）それが舞踏の訓練に加えて、スキューバダイヴィングによって保たれているのかと納得した。（p. 172（34）） （7）「いやあ、奥さん、僕はとっても楽しいです。」ろれつの回らなくなった舌で邪魔者はわめいた。「ああ、そうですか。」なるべく感情を込めずに言った。（p. 172（35））
D）発見
（8）病院の住所は牛込であった、地図を調べてすぐ場所を突きとめた。入院していたのか。（p. 173（36））
E）驚き・感嘆・詠嘆
（9）とうとうボケ始めたか。たまには違う話題にしてほしいわね。（p. 172（38）） （10）どんなに嬉しかったことか。（p. 173（39）） （11）もう夏も終わりか。（p. 173（40））
F）不満
（12）あの人々を殺すのはおれだ、と絶えず意識しながら私は家族の生存を計らねばならぬのか。（p. 173（41）） （13）親父たちがいたら、叔母の世話ぐらいできないのかと必ず文句を言ったに違いない。（p. 173（42））
G）反語・擬似反語
（15）おれがそんなこと知るか。（p. 174（43）） （16）名簿や制服、黒板に名前を書くチョークの色まで、男女に差をつけることに意味があるのか。（p. 174（46））

ヴィングによって保たれているのかと納得した」は「～カ」が表す不定真偽判断の違いに基づいてそれぞれ B）不確かさと C）納得・了解とに分類されたと言えるであろうか。

加えて、資料のタイプも混質的である。文末に置かれる「カ」の例には、（1）のように小説の会話部分もあれば、（8）のように心内語もあり、また（16）のように新聞記事もある。書き言葉の文末にあらわれる「カ」と話し言葉の文末に置かれる「カ」は同じ次元に並べてよいものであろうか。

そして、もう一点は真偽判断にかかわらない「カ」の用法の位置づけが不明であることである。益岡自身が断っているとおり、この整理は「カ」が表す不定真偽判断を対象としたものであり、真偽判断にかかわらない「カ」の用法はこの枠組みの中に位置づけることができない。たとえば、相手の意向をたずねる、次のような疑問文は益岡 2007 の分類に含まれえない。

（17）　明日一緒に映画を見に行こうか。
（18）（友達とレストランに来て、メニューを見ながら）何を食べようか。

3.　本稿の方針

以上を踏まえ、本稿では改めて話し言葉において文末に「カ」が置かれる文（以下、文末「カ」の文）にどのようなものがあるか観察してみたい。対象を文末「カ」の文に限定するのは、上述のとおり、文中にあらわれる間接疑問文の「カ」について、後接する動詞の語彙的意味を離れて「カ」それ自体の意味やはたらきを考えることが難しいためである。文中の「カ」を対象としないため、「誰かいる」や「コーヒーか紅茶（か）が飲みたい」のような「カ」も考察の対象に含まれず、したがって、「カ」の全用法を網羅的に扱うことはできない。

また、対象を話し言葉に限定するのは、文末に「カ」を置く発話動作として文末「カ」の文を見たいためである。平叙文末に「カ」を添えれば疑問文になるという感覚は話し言葉の時間的線状性の上に成り立つものであ

り、疑問文と「カ」の関係を考えるに際しては、話し言葉において発話の最後に「カ」を添える動作として文末「カ」の文を見ることが不可欠である。

結論を先に述べれば、話し言葉の文末「カ」の文は「述べることの回避」を明示する発話である。疑問文として存在する文末「カ」の文が述べない発話であるのは当然だが、疑問文でなくとも、文末「カ」の文はすべて何事かを言語化しながら述べることを避ける発話である。ただし、何を述べることを避けるかによって発話の具体的なあり方は大きく異なる。そこで、以下ではどのような内容が言語化されたものに「カ」が付され、述べることが回避されるのかという観点から文末「カ」の文の整理を行う。

調査には稿末に挙げる映画シナリオの台詞部分を用いる。文末に「カ」を置く発話の具体的なあり方を精査するには、実際の会話をもとにしたデータを資料にするのがもっとも適切であるが、本稿では実際の会話データによる調査のための予備的考察として、会話がより整った形であらわれるシナリオを用いることにする。

4. 文末「カ」の文

4.1 非疑問の文末「カ」の文

非疑問の文末「カ」の文には、(A) 反芻 (B) 受理 (C) 戸惑い (D) 詠嘆の4タイプがある。

(A) 反芻

(19)(ニシノが死後に幽霊になって昔の知り合いの目の前に現れる)
ニシノ「みなみちゃん？大きくなったねぇ」
みなみ「！！！」
ニシノ「夏美さん、いる？」
みなみ「夏美？母は母は……あなた、誰？どうやって……」
ニシノ「あ、怪しい者じゃないよ。幽霊だから怪しいっちゃ怪しいか」

みなみ「ゆゆゆーれいっててて」　（ニシノ 11）

（20）（転勤する同僚の見送りのため、佐々木課長に勤務中に外出する許可を求める）
久美子「課長、見送りに行ってもいいですか？」
恵「あたしも」
佐々木「じゃ、俺も行くか」　（釣りバカ 34）

話し手自身が気づいたこと（（19））や決めたこと（（20））に「カ」を添える発話は、動作として見れば、気づきや決意を反芻し、かみしめることである。（19）（20）は気づきや決意の内容が話し手のそれまでの立場に沿わないものである点で共通している。（19）では、「怪しい者じゃない」と言った直後に自身の怪しさを認めて「怪しいっちゃ怪しいか」と言う。また、（20）でも、話し手（佐々木課長）は勤務態度の悪い部下を好ましくない人物として遇してきたが、その去り際に至ってこれまでとは態度を変え、見送りに行くことにして「俺も行くか」と言う。自らの気づき・決意であるにもかかわらず、意外性ゆえにそれを消化しきれないでいるこれらの文の話し手は、「怪しいっちゃ怪しいね」「俺も行く！」と言ってしまうのではなく、「カ」を添えて発話することを選ぶのである。

このような立場の変更以外でも、自らの気づきを口に出して反芻する発話がある。たとえば、かかってきた電話に出た人が、電話をかけてきた相手が誰であるか気づいた際の（21）のような発話がこれに当たる。

（21）（かかってきた電話に出る）
ニシノ「はい。ああ、カノコか。なに？」
カノコ「うん、たいした用があるわけじゃないんだけど（後略）」
（ニシノ 17）

同様に、徹夜で仕事をしていて、ふと気づくと外が白んでいた時に発する「朝か」のような独り言も（A）反芻タイプの文末「カ」の文である。定延 2002 によれば、気づきは話し手の心内で生じる出来事であるために気づきの「そう」は本来的に独話的性質を帯びやすいというが、確かに、

(19)～(21) の発話も相手がいる場面でなされながら、どこか独話的である。このタイプの文末「カ」の文は相手に何かを伝達することを目的とする発話ではなく、話し手自身が自分の気づきや決意を処理する行為に連動した発話であると考えられる。

(B) 受理

(22) (自宅のチャイムが鳴る。ニシノがドアを開けたら、隣人がいる)
タマ「あの、すみません、猫」
ニシノ「猫？」
タマ「猫、お邪魔してません？」
ニシノ「猫ですか」
(部屋を振り返って)
ニシノ「来てないみたいですが」 (ニシノ 22)

(23) (会社の自席で新聞を読みながら)
伝助「『鈴木建設、ウォーターフロントプロジェクトに参入か』か。我社の社長もやるじゃねえか。僕もずっと前から目をつけてたんですよ。(後略)」 (釣りバカ 29)

(A) 反芻とは反対に、相手の発言 ((22)) や新聞記事 ((23)) など、外から与えられる情報を受け取った話し手が、その内容を改めて言葉にして「カ」を添える発話もある。このタイプには、受け取った情報を「そう」に言い換えて「カ」を添える「そうですか」「そうか」の形も多い。

(24) (釣り仲間の伝助から一緒に釣りに行くのをやめようと言われ、一之助が抵抗する場面)
一之助「そこを何とかお願い出来ませんでしょうか」
伝助「俺もつらい、つらいですけどね、この付き合いは鈴さんのためにならないから。ね、わかって下さい」
一之助「そうですか。わかりました。どうもお騒がせしてすみません」
(釣りバカ 33)

これらの例に共通するのは、情報を受け止める行為に連動して発話されることである[2]。(22) では相手が猫を探して訪ねてきたことを受け止めな

がら「猫ですか」と言い、部屋を見渡して猫がいないか確かめる。「猫ですね」という受理表明のし方もあるのに、あえて「猫ですか」と「カ」を添えれば、まだ受け止めている最中であり、完全には処理しきれていない感じがする。これは、(24) のように、一度は抵抗した話し手が、懇願を受けて相手の考えを受け止める方向に転換した場面での最初の発話が「そうですか」であることからも明らかである。

情報を受け止めるという行為自体は無言でも成立するのに、あえて内容を口に出す動作を伴うのはなぜか。(22)「猫ですか」や (24)「そうですか」では相手の意に沿って依頼や主張を飲み込んだことを伝えるために、受け止めている最中であることの明示が意味を持つと考えられる。

一方、(23) のように読んでいる新聞記事の内容を受け止めている最中であることをわざわざ言葉にして示すのは、その内容についてその場にいる人たちと話したいとか、そのような内容を受け止めている自分を人に見てほしいという意識があるのだと考えられる[3]。実際に、(23) の例の後に脚本のト書きとして「課員たち、伝助を無視している」とあることから、話し手がこの発話をきっかけにその場にいる人たちとコミュニケーションをとりたいと希望する人物として描かれていることがわかる。

(C) 戸惑い

(25) (釣り好きの伝助が一之助に釣りの魅力を語る)

伝助「どうおじいさん、釣りやらない。やったことある、海釣り」

一之助「小さいときに近所の川で鮒を釣ったきりで」

伝助「いいよ、釣りは。広い海で潮風に吹かれて、じっと魚信を待ってる気持、他のことなんかなんにも考えないからね、気持がスカーッとするよ」

一之助「そんなに面白いですか」

伝助「一緒に行こうよ、連れてってやるから」　(釣りバカ 15)

(26) (勤務中にあくびばかりしている部下に怒る)

佐々木「君、その欠伸一体朝から何回目だ！」

伝助「いえ、数えてませんけど」
佐々木「ごっ五回目だよ。そんなに本社は退屈か」
伝助「別に退屈してるわけじゃないんです。酸素が足りないからなんです」（釣りバカ 13）

このタイプは一見疑問文のように見えるが、「そんなに面白いですか」「そんなに本社は退屈か」という発話は「面白いですよ」「退屈ではありません」など Yes/No の答えを求めているわけではない。

このタイプの文末「カ」の文で「カ」の前に置かれるのは、理解に苦しむ相手の言動に対する話し手なりの解釈である。たとえば、（25）の例では、伝助の釣りに対する思いがあふれる発言に圧倒される一之助の「（釣りは）そんなに面白い」という解釈に「カ」が添えられる。また、（26）では本社に転勤してきた部下が栄転にはりきるどころかあくびばかりしているという事態に接して憤る話し手のこの事態に対する解釈「そんなに本社は退屈（だ）」に「カ」が添えられる。相手の言動に戸惑う話し手にとって、相手の言動から導かれる解釈を「そんなに面白いんですね」「そんなに本社は退屈なんだね」と素直に述べるのは無理なことである。これに対して、「そんなに面白いですか」「そんなに本社は退屈か」と「カ」を添える発話なら戸惑いの感情と両立する。

（D）詠嘆

（27）（一之助の嘘がみち子にばれて）
みち子「どうして早くおっしゃらなかったの、その事を。私が仕事の世話をした時に、あなたは何度も『ありがとう』って言ったけど、あれは私をからかってたんですか。嘘だったんですね」
一之助「いやいや、嘘なんかじゃないんです。あなたに同情され、親切にされて、私はどんなに幸せだったか――。それは本当ですよ。（後略）」（釣りバカ 31）

日本語の詠嘆表現には様々な形式があるが、そのひとつに（27）のよう

に「疑問詞（なんて、どんなに、どれほど、など）～か」という形式がある。疑問詞の存在ゆえに疑問文との近さが感じられるものの、疑問文とは一線を画す。というのも、疑問詞疑問文の場合、普通体で文末に「カ」を添える文は書き言葉には存在できても、話し言葉の発話としては存在しにくいからである（益岡・田窪 1992）。

この場合、たとえば「死んでもいいと思うくらい幸せだった」と言うのとは異なり、文字通り言葉にできないほどの感動を抱えていることを言葉にする、ある意味では矛盾した発話そのものが詠嘆の動作であると言える。

以上、非疑問の文末「カ」の文として、（A）反芻、（B）受理、（C）戸惑い、（D）詠嘆の 4 タイプを挙げた。これらはすべて、新しい事態に対する慎重な態度、感情的違和感、強い感動など、話し手の心の動きに連動した発話である。すなわち、反芻するという行為、受け止めるという行為、戸惑うという行為、詠嘆するという行為自体がこの発話をその動作の一部としているのである。

（A）（B）が気づき・決意をしてから、あるいは情報を与えられてからの時間経過の中で、まだ堂々と述べるには至らないゆえに「カ」を添える発話の形をとったのに対して、（C）（D）は話し手が心情的に堂々と述べきれないゆえに「カ」を添える。これらに共通するのは、「カ」の前に置かれる内容を堂々と述べる文ではないこと、むしろ堂々と述べることを回避する様子をあからさまにする文であることである。

したがって、文末に「カ」を添えるという発話の形は堂々と述べない発話の形であると言える。もちろん、「カ」がなくても疑問文が成立することから明らかなように、「カ」を添えなくても述べない発話をすることはできる。厳密に言えば、文末に「カ」を添える発話は述べることの積極的回避を明示する発話なのである。

4.2　疑問の文末「カ」の文

疑問の文末「カ」の文も当然、述べることを回避する文である。本稿筆者は以前、疑問文を人のいるところで発話すれば、聞いた人は何らかの言語的反応をしなければならない気になると述べた（林 2016）。疑問の文末「カ」の文の動作的意味はこの「答えを引き出す」というところにあると見ることができる。ただし、どのような内容に「カ」を添えるかによって、相手から引き出す答えの内実は異なる。そこで、「カ」の前に置かれる内容および引き出す答えに応じて疑問の文末「カ」の文を（E）～（G）に分ける。

（E）事実追究

もっとも典型的な疑問の文末「カ」の文は、話し手がそのような事実が存在すると想像する内容に「カ」を添えた文である。（28）のように想像内容がすべて言語化されている場合（Yes/No 疑問文）と、（29）のように一部（「誰」）が不明なままの場合（Wh 疑問文）がある。このタイプの文末「カ」の文は当然、事実がどのようであるか話し手にとってはわからないために、述べることを回避しているのであり、事実がどうであるかを明らかにする情報を答えとして引き出す。

（28）（社用で葬儀に行く前に佐々木課長がたずねる）
佐々木「君、喪服をもってきたか？」
伝助「ええ？俺も行くの？」
佐々木「昨日言ったろう。バカ！」　（釣りバカ 29）

（29）（上司が部下にたずねる）
草森「今日の葬儀には他に誰が行くんですか」
佐々木「課の者三名ほどが」　（釣りバカ 28）

（F）判断求め

この世に存在する事実ではなく、相手の判断や意見を知りたい場面では、相手にこのように言ってほしいという内容（（30））や相手がこのよう

に言うであろうと話し手が思っている内容（(31)）が「カ」の前に置かれる。相手の判断や意見を話し手が勝手に述べるわけにいかないから、述べることを回避しているのであり、相手から引き出すのは当然、判断や意見である。

(30)（転勤する同僚の見送りのため、佐々木課長に勤務中に外出する許可を求める）
久美子「課長、見送りに行ってもいいですか？」
恵「あたしも」
佐々木「じゃ、俺も行くか」　（釣りバカ 34）

(31)（新しくバイトに入ってきた一子に対して、野間がいろいろと話しかけるが、一子は反応しない）
野間「あの、何か怒ってます？」
一子「え……？」
野間「あ、私うるさいですか？うるさかったら言ってください。おしゃべりなんです私。（後略）」　（百円の恋 220）

(G) 提案・誘い

疑問の文末「カ」の文には、動詞シヨウ形で表される話し手の意志に「カ」を添えたものもある。

(32)（秘書が社長に昼食についてたずねる）
草森「今日は何かお取りしましょうか？それともどこかに予約致しましょうかね」
一之助「ほっといて下さい、昼めし位自分で食べます」　（釣りバカ 14）

(33)（家の前で待ち伏せをしていたニシノに対して）
タマ「……何してんの？」
ニシノ「いや…重そうだね。手伝おうか？」
タマ「いいです」　（ニシノ 26）

(34)（旅行先で散歩をしている）
カノコ「冷えて来たね。宿に帰ろうか」
ニシノ「いいの？」　（ニシノ 19）

(35)（アルバイトの面接）
岡野「あ、すんません。それじゃ来週からにしましょうか。よろしくお

願いします」
一子「……お願いします」　（百円の恋 219）

これらの発話において、話し手の意志（「手伝おう」など）自体に迷いはない。にもかかわらず、あえて「カ」を添えるのは、それが相手への配慮を示すことになるからである。「手伝おう」「宿に帰ろう」と言い切ってしまわず、「カ」を添える発話からは、話し手の「手伝う」という行為を受ける相手や、話し手と一緒に「宿に帰る」という行為を行う相手の意向をくみとる姿勢が感じられる[4]。したがって、相手から引き出す答えは、話し手の意志に対する相手の意向である。

4.3　文末「カ」の文の全体像

ここまで、非疑問文と疑問文に分けて文末「カ」の文を見てきたが、どのタイプの文末「カ」の文も、第一に述べない文であり、第二に文を発話することが何らかの行為に連動している点で共通している（表 2）。ある内容を述べ、その内容を相手に伝達する典型的な平叙文とは異質の、動作性の高い文が文末に「カ」を置く発話において実現しているのである。

表 2　文末「カ」の文

		「カ」の前に置かれる内容	連動する行為
非疑問	(A) 反芻	話し手の気づき・決意	時間をかけて消化する
	(B) 受理	外から与えられた情報	時間をかけて受け止める
	(C) 戸惑い	相手の言動に対する解釈	相手の言動に戸惑う
	(D) 詠嘆	感覚や感想	程度の大きさに感動する
疑問	(E) 事実追究	そのような事実があると想像する内容	情報提供を求める
	(F) 判断求め	相手に言ってほしい内容・相手が言うはずの内容	相手の判断や意見を求める
	(G) 意向確認	話し手の意志	相手の意向を気にかける

5.　普通体の文末「カ」の文の不自然さ

冒頭で述べたとおり、終助詞「カ」は疑問文成立にとって不可欠な要素ではない。それどころか、普通体では、文末「カ」の疑問文は「えらそうな男性」の話し方でしか許されない。次の例のように、丁寧体（(36)）では「カ」があってもなくても質問文として成立するのに対して、普通体（(37)）では「カ」がない文の方が「カ」がある文よりも質問の文型として一般的なのである。

(36) a.「昨日学校行きましたか？」
　　b.「昨日学校行きました？」
(37) a.「昨日学校行ったか？」
　　b.「昨日学校行った？」

前節で述べたように文末「カ」の文には非疑問文も含め、多様なタイプが存在するが、「普通体カ」の文の不自然さは文末「カ」の文すべてで同じようにあらわれるわけではない。上の整理に沿って言えば、(C)（E）（F）では「普通体カ」はえらそうな男性の話し方に聞こえるのに対して、(A)（B）（D）（G）では「普通体カ」にそのような特定のキャラクタ[5]とのむすびつきは感じられない。

【「普通体カ」がえらそうな男性の話し方になる】
(C)（26）佐々木「ごっ五回目だよ。そんなに本社は退屈か」
(E)（28）　佐々木「君、喪服をもってきたか？」
(F)「見送りに行ってもいいか？」
　　←（30）　久美子「課長、見送りに行ってもいいですか？」

【「普通体カ」が特定のキャラクタとむすびつきを持たない】
(A)（19）ニシノ「あ、怪しい者じゃないよ。幽霊だから怪しいっちゃ怪しいか」
　　（21）（電話に出る）ニシノ「はい。ああ、カノコか。なに？」
(B)「猫か」←（22）ニシノ「猫ですか」
(D)（27）一之助「（前略）私はどんなに幸せだったか――。（後略）」
(G)（33）ニシノ「いや…重そうだね。手伝おうか？」
　　（34）カノコ「冷えて来たね。宿に帰ろうか」

実際には（34）以外はすべて男性話者の台詞として書かれた例であるが、（A）（B）（D）（G）に挙げた例は「えらそうな」感じが感じられず、女性話者が同じ発話をしてもかまわない。これに対して、（C）（E）（F）の例は女性話者の発言としては存在しえない。

この「えらそうな男性」キャラクタとのむすびつきは統語構造の問題ではない。たとえば、（A）の例である（21）も（C）の例である（26）も、述語たる名詞に直接「カ」が接しており、統語構造の点では同じである。にもかかわらず、発話における「えらそうな男性」キャラクタとのむすびつきの有無の点では異なる。

では、「普通体カ」の文が「えらそうな男性」キャラクタとむすびつく（C）（E）（F）とそのようなむすびつきのない（A）（B）（D）（G）を分けるものは何か。それは、話し手が何らかの不確定感覚を持っているか否かにあると考えられる。すなわち、相手の言動に対して感情的な違和感を持つ（C）戸惑いや、話し手にはわからない事実や相手の判断を明らかにすることを求める（E）事実追究および（F）判断求めの話し手は、「カ」の前に置かれた内容について不確定感覚を持っている。これに対して、（A）（B）（D）（G）の話し手には「カ」の前に置かれた内容に対するそうした感覚がない。

このように不確定感覚の有無が「普通体カ」と「えらそうな男性」キャラクタのむすびつきの有無を左右する事情は、以下のように考えられる。話し手が内容に対して不確定感覚を持っていることは、言い換えれば、話し手が述べられる立場にないことを自覚しているということである。したがって、本来は選択の余地なく、述べることを回避せざるをえない。にもかかわらず、わざわざ「カ」を添えて「自分が述べるのはやめておく」ことをあからさまにするのは、まるで自分に述べる権利や責任があった（のに自らの意志でそれを手放した）と言うかのような尊大なふるまいに映る。このことが「えらそうな男性」キャラクタとのむすびつきを生むのだと考えられる。丁寧体であれば、この尊大さは軽減されるが、（28）を丁寧体

「君、喪服をもってきましたか？」にしても「えらそうな男性」キャラクタとのむすびつきが完全になくなるわけではない。

これに対して、不確定感覚を持っていない場合、文末に「カ」を置いて述べることを回避する発話は、本来は述べることができる内容についてあえて述べないでおくこと（の明示）を意味する。それは（A）反芻や（B）受理では時間をかけて内容を消化する過程をあからさまにすることであり、（D）詠嘆では深い感動の中にいることをあからさまにすることである。また、（G）意向確認では相手に配慮し、勝手に述べてしまうことをためらう話し手の様子を見せることになる。どの場合も、慎重な態度や謙虚な態度、気遣いを感じさせることはあっても、尊大さを感じさせるものではない。（A）（B）（D）は独り言として発話されることもあるものの、人前で発話する場合には、接する物事に真摯に向き合う話し手の姿を見せることになる。また、（G）はまさに対人配慮の理由から述べることを回避しているのであり、本質的にコミュニケーション機能の高い表現であると言うことができよう。

「普通体カ」のぞんざいさは先行研究で自問（独り言）を相手に投げ出すことの不自然さとして説明されてきた（金水 2012）。しかし、「普通体カ」が尊大な表現に映り、「えらそうな男性」キャラクタとむすびつくのは（E）事実追究・（F）判断求めという二つのタイプの疑問文と（C）戸惑いの文であり、疑問の文末「カ」の文とは範囲が一致しない。また、（A）話し手の気づき・決意の反芻や、（B）外的情報の受理の場合には「普通体カ」が話者制限を持たず、また（G）意向確認の場合にはむしろ「普通体カ」の構造である「シヨウカ」疑問文が「シヨウ」平叙文より丁寧な文型として機能する。これらのことから、「カ」を添えて「述べることの回避」をあからさまにする発話は場面に応じて異なる待遇的価値を持つことがわかる。

6. まとめ

本稿では、文末に終助詞「カ」を置く文について、次のことを明らかにした。

1. 文末「カ」の文は、「カ」の前に置かれる内容の別によって、7 種に分類することができる。
2. どのタイプの文末「カ」の文も述べることの回避を明示する文である点と、発話が話し手の行為に連動する動作性の高い文である点で共通している。
3. 文末「カ」の文を普通体で発話した際に「えらそうな男性」キャラクタとのむすびつきを持つか否かには、話し手が不確定感覚をもって発話するか否かがかかわっている。

最後に本稿の分析の範囲内で「カ」と疑問文の関係について述べようとすれば、文末「カ」の文においては疑問文であるか否かと話し手が不確定感覚を持つか否かは一致しないことが注目される。すなわち、「カ」と疑問文のむすびつきは、文末「カ」の文の述べない発話が相手から答えを引き出すという行為に連動する点にあるのであり、話し手が不確定感覚を持つ点にあるのではない。ただし、述べないことと不確定感覚を持つことのずれについての精密な議論は今後の課題としたい。

調査資料

89'年鑑代表シナリオ集『釣りバカ日誌』
14'年鑑代表シナリオ集『ニシノユキヒコの恋と冒険』『百円の恋』

参考文献

井上優（2002）「“是吗？”に関する覚え書」『「うん」と「そう」の言語学』ひつじ書房
金水敏（2012）「疑問文のスコープと助詞「か」「の」」『国語と国文学』89-11
国立国語研究所（1960）『話しことばの文型』
佐久間鼎（1940）「終助詞「か」と発問の態度」『現代日本語法の研究』厚生閣
定延利之（2002）「「うん」と「そう」に意味はあるか」『「うん」と「そう」の言語学』

ひつじ書房
定延利之（2011）『日本語社会のぞきキャラくり　顔つき・カラダつき・ことばつき』三省堂
定延利之（2016）『コミュニケーションへの言語的接近』ひつじ書房
土屋俊・白井賢一郎・鈴木浩之・川森雅仁（1990a）「日本語の意味論をもとめて 4 日本語に疑問文はない」『言語』19-4
土屋俊・白井賢一郎・鈴木浩之・川森雅仁（1990b）「日本語の意味論をもとめて 5 選択・疑問・詠嘆・存在の「か」」『言語』19-5
土屋俊・白井賢一郎・鈴木浩之・川森雅仁（1990c）「日本語の意味論をもとめて 6 「あっ、そうか」の意味論」『言語』19-6
日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法 4　第 8 部モダリティ』くろしお出版
林淳子（2016）「言語的反応の観点による日本語疑問文の分類」『日本語学論集』（東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室）12
益岡隆志（1992）「不定性のレベル」『日本語教育』77
益岡隆志・田窪行則（1992）「第 7 章　疑問と否定の表現」『基礎日本語文法―改訂版―』
益岡隆志（2007）『日本語モダリティ探究』くろしお出版

注

1　たとえば、日本語記述文法研究会編 2003 では、疑問文のタイプや述語の品詞別に「カ」の付加の有無が整理されており、疑問文の成立にとって「カ」の付加が重要な文法的手段であると認識されていることがうかがえる。

2　この点で同じ受理の表現でも、話し手が受け止めきったことが示唆される受理のノダ文（「へえー、猫飼ってるんだ」）と異なる。

3　もちろん、話し手以外に人がいない場所での発話であれば、単に自分自身に言い聞かせるための発話であるし、人がいる場所での発話でも自分に言い聞かせているだけの場合もある。

4　しばしば「シヨウカ」疑問文による誘いの表現が「シヨウ」平叙文による誘いの表現よりも「丁寧な表現」であると言われるのはこのためである。

5　ここでいう「キャラクタ」とは定延 2011 が挙げるキャラクタとことばのむすびつき方のうち「発話キャラクタ」にあたるものである。すなわち、ことばが「そのことばを発する話し手のキャラクタをも暗に示す」（p. 110）というむすびつき方である。